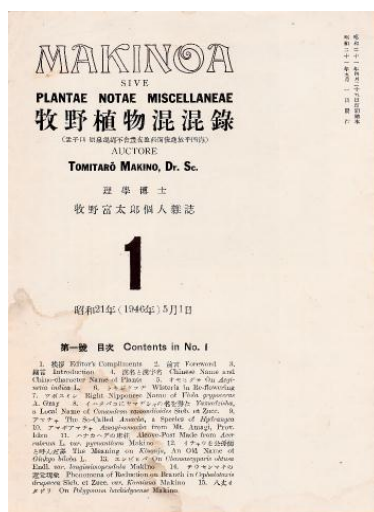
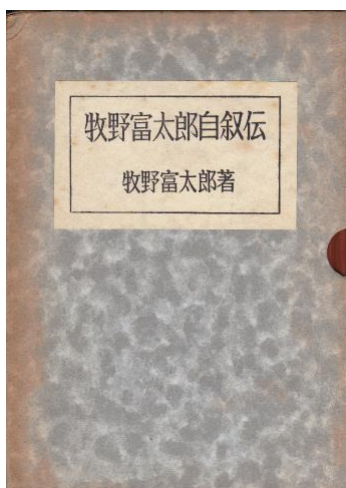


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第9号

(2013年1月)



～牧野富太郎生誕150年～

北光クラブ
自然観察クラブ

『牧野富太郎自叙伝』(昭和31年12月20日 長嶋書房発行)

講談社学術文庫に収録

個人雑誌『牧野植物混混録 第一号』(昭和21年5月1日 鎌倉書房発行)

(初版は19年10月31日)

牧野富太郎の伝記には次のようなものがある。

中村 浩著『牧野富太郎』(少年少女新伝記文庫17) 昭和30年 金子書房

上村 登著『牧野富太郎伝』 昭和30年11月15日 六月社

渋谷 章著『牧野富太郎 私は草木の精である』(シリーズ民間日本学者4)

1987年1月20日 リプロボート、平凡社ライブラリーに収録

『牧野富太郎自叙伝』は、

第一部 牧野富太郎「自叙伝」／第二部 牧野混混録／第三部父の素顔 牧野鶴代の3部から成っている。

「第二部 牧野混混録」は、牧野富太郎の個人雑誌『牧野植物混混録』の主に巻頭に収められた文章をまとめたものである。この雑誌は昭和19年に創刊され、100部を発行したが、第2号は印刷製本が完了した直後、戦いで第3号の未刊原稿と共に焼失した。昭和21年5月に第1号が再版発行され、少なくとも14号まで発行されたいい。

「第二部 牧野混混録」より

植物に感謝せよ

植物と人生、これは中々の大問題で、単なる一篇の短文では其意を尽すべくもない、堂々数百頁の書物が作り上げらるべき程その事項が多岐多量で且重要なのである。

ところが此処には右の様な龍頭的な大きなものは今遽かに書く事も出来ない、ほんの蛇尾的な少しの事を書いて見る。

世界に人間ばかりあって植物が一つも無かったならば「植物と人生」という様な

(次ページへ続く)

問題は起りっこがない、ところが其処に植物があるので茲に始めてこの問題が抬起する。

人間は生きているから食物を摂らねばならぬ、人間は裸だから衣物を着けねばならぬ。人間は風雨を防ぎ寒暑を凌がねばならぬから家を建てねばならぬので其処で始めて人間と植物との間に交渉があらねばならぬ必要が生じて来る。

右の様に植物と人生とは実に離すことの出来ぬ密接な關係に置かれてある。人間は四圍の植物を征服していると言うだろうが又之れと反対に植物は人間を征服していると謂える。そこで面白い事は植物は人間が居なくても少しも構わずに生活するが人間は植物が無くては生活の出来ぬ事である。そうすると植物と人間とを比べると人間の方が植物より弱虫であると謂えよう、つまり人間は植物に向こうてオジギをせねばならぬ立場にある。衣食住は人間の必要欠くべからざるものだが、その人間の要求を満足させてくれるものは植物である。人間は植物を神様だと尊崇し礼拝しそれに感謝の真心を捧ぐべきである。

我等人間は先ず我が生命を全うするのが社会に生存する第一義で、即ち生命あってこそ人間に生まれ来し意義を全うし得るのである。生命なければ全く意義がなく、つまり石ころと何の拠ぶ所がない。

その生命を繋いで柳井で、天命を終るまで続かすには先ず第一に食物が必要だが、古来から人間がそれを必然的に要求する為めに植物から種々様々な食物が用意せられている。チョット街を歩いても分り又山野を歩いても分るように、街には米屋、雑穀屋、八百屋、果物屋、漬物屋、乾物屋などが直ぐ見付かる。山野に出れば田と畠とが続き続いているいろいろな食用植物が実に見渡す限り作られて地面を埋めている。その耕作地外では尚食用となる野草があり、菌類があり木の実もあれば草の実もある。眼を転ずれば海には海草があり淡水には水草があつて皆我が生命を繋ぐ食物を供給している。

食物の他にはさらに紡績、製紙、製油、製薬等の諸原料、又建築材料、器具材料などがあつて吾人の衣食住に向つて限らない好資料を提供しているのである。そこで吾人は此れ等無限の原料を能く有益に消化応用する事によつて所謂利用厚生の実を挙げ幸福を増進する事を得るのである。

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して適宜直してあります。

初冬の日だまりハイキング
～益子・三登谷山～雨巻山～足尾山～
12月9日（日） 天気・晴れ

今回も早朝6時集合、まだ日の出前の薄暗い時分の出発です。総勢10名、車2台に分乗し、目的地へ向かう途上、茂呂・花木センターの高台で、昇ったばかりの太陽を拝みました。

益子の町を抜け、行き届いたガイドマップも常備された大川戸の駐車場に車を置いて、林道を少し入ってから登り始めます。道中、地元「益子いくべ会」の設置した標識に導かれながら、三登谷山（433m）、雨巻山（533m）と登り下りを繰り返しますが、さほど厳しい箇所もなく、落葉樹の葉が落ちて明るい冬の好天下の山歩きを楽しみました。残念ながら東京スカイツリーや富士山までは見えませんでした。しかし終日風が冷たく、雨巻山頂での昼食時の気温は4.5度、1日中本当に寒かった。冬枯れの山でも、植物好きには発見の多い行程でした。

帰りに地元の酒蔵へ、もちろん今回は試飲なしでした。

（北光クラブニュースNo.121掲載）



鹿沼・花木センターから見た雨巻山

✿ 参加者

鈴木若菜、平井亜湖・好（祖父）、

小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、阿部瑞穂・良司・みゆき（計10名）

✿ 見た樹木

アオハダ、アカメガシワ、アベマキ、ウリハダカエデ、コナラ、ジャケツイバラ、シラキ、タカノツメ、ダンコウバイ、ニワウルシ、ネジキ、ブナ、マンサク、リョウブ（落葉樹）

アカガシ、ウラジロガシ、カヤ、シキミ、シラカシ、ツルグミ、ヒサカキ、ミヤマシキミ（蕾と実）、ヤブコウジ、ヤマツツジ（常緑樹）

✿ 見つけたキノコ・シダ

カワラタケ、エノキダケ（食用）、ニガクリタケ（有毒）、ウラジロ

✿ 見た鳥

ウソ、コゲラ（?）、メジロ、ヤマガラ

✿ 虫の痕跡

キボシアシナガバチ（巣）、コアシナガバチ（巣）、ヒメヤママユガ（まゆ）

✿ 参加者からいただいたおたより

雨巻山で見た樹木

雨巻山の標高は僅か533mと低い山にもかかわらず、ふつうは800m以上でないと見られないブナやウラジログシ、ミヤマシキミと、中・低山に分布するアカガシ、ツクバネガシ、ツルグミなどが混生する珍しい樹木葬を形作っています。

別ルートで下山。山麓には枋木では初めて見るジャケツイバラ（バラというがマメ科）の他、野生化したニワウルシ（別名シンジュ）が、まわりの木に負けないように高く育っていました。隣の木と仲良く生えているかのように見えますが、少しでも高くなって日光を思う存分に浴びたいために競争しているのです。

これは植物の競り合いでコンペジションと言います。ニワウルシやメタセコイアは中国に残っていますが、日本では絶滅した樹木で、化石がそれを物語っています。明治8年頃、津田仙という人がウィーンの博覧会に行ったときにニワウルシの苗木を持ち帰り、東京に植えたのが最初と言われています。春になり、いろんな草や木の花が咲く頃に訪れると、新たな発見が期待できそうな山です。（山口龍治）

キボシアシナガバチの巣



コアシナガバチの巣



お正月に欠かせないウラジロ



私の植物新発見

～12月9日、益子・雨巻山～

同じ鹿沼でも初めて行った所では初見の植物に出会うことがある。もっとも「ここは私のフィールド」などと自負していた場所でも、特に季節を変えてたまたま花の咲いている時にでも出くわしたりして初見の植物を発見することも、少なからずあるのだ。初見の植物に出会う可能性は、それが遠い所であればある程高くなる。最近、鹿沼から出ることすら少なくなってきた私は、初見の植物に出会うなどという機会もまれになってきた。

今回出掛けた益子にはスタジイを主とする照葉樹林で知られる西明寺(高館山)がある。地形の関係で、ここが特に日が当たり暖かい、という話も聞いたが、これが自然に生えたか人が植えたかは別として、それらの樹木が切られずに巨樹になれたのはやはりお寺の境内であるからだと思う。スタジイは植えられたものとしても、アカガシやカゴノキはどうなのだろう。これらはすべて鹿沼には野生がないから、どうしても暖地性の植物、というイメージなのだが。

益子・雨巻山は、鹿沼と同じような落葉樹林で、この日の寒さは別としても明るい尾根歩きが続いた。ネジキ、リョウブ、アオハダ、マンサク、アカメガシワ、コナラなどの他、タカノツメ、シラキ、ウリハダカエデなども見られた。標高500mに満たない山で、山頂付近にブナが数本あるのには、やはりおどろいた。鹿沼では古峰ヶ原の1000m位の所にブナがあるが、このような低山ではイヌブナが多いものである。石裂山にもイヌブナは多いが、ブナはない。

常緑樹ではヤマツツジ、シラカシ、ウラジロガシ、シキミ、ヒサカキ、ツルグミ等鹿沼と共通する物も多かったが、鹿沼方面では岩山や古賀志山でわずかに見られるミヤマシキミがいたる所で見られ、早春に咲くための赤や白の蕾を、地面から50cm程までにしか伸ばせない枝の先端に付けているのと同時に、真っ赤な実を付けているものもあった。針葉樹では、鹿沼では落葉樹林の中で時々モミヤ、古峰ヶ

(次ページへ続く)

原ではウラジロモミを見るが、ここではなんと、ほとんどがカヤであった。なによりもおどろいたのは所々にある常緑の高木が、シラカシと思いきや、アカガシであったことだ。

私一人で歩いていたら、多分、シラカシで済ましていたと思う。山口さんが「これはアカガシですね。葉柄が長いでしょう。」と言うのでしじみ見てみたら、確かに柄が長いし、シラカシでは葉の上半分にある鋸歯がこれにはなく全縁。シラカシが元の部分も先端もしたいに細くなっていくのに対し、アカガシは先端部が幅広く、急に細まる。それにシラカシよりも厚くツヤがあるように見える。益子でもアカガシがあるのは西明寺ならではのことであったが、鶏足山地では普通の樹木なのであるらしい。(※シラカシ、アカガシなどの葉の比較は9ページをご覧ください)

山を降りて林道を歩いていると、大きな羽状複葉がおちていた。「サワグルミかな、いやカラスザンショウですね」と山口さんは「これはニワウルシです」と言う。そう言われて木の葉の落とし主である高木の幹を見てみると、確かにカラスザンショウにあるはずのトゲがない。そのかわり、太い幹の樹皮はカミソリの歯を何重にも立てたようなヒダになっている。こんなの初めてだ。そういえば、前回烏山でも庭先に植えてあった樹木がニワウルシである、と山口さんから教えてもらったばかりであった。そのときは幼樹で幹には特徴がなかったが、この太いニワウルシの幹を見ればひと目で初見の樹木であることがわかる。

あとで参加者から聞いたことだが、他にも私の見たことのないアベマキやジャケツイバラがあったのを山口さんから教えてもらったそうである。これからは山口さんのすぐ後ろについて歩くことにする。

それにしても、あの大きなコゲラ(に似た鳥)は誰だったんだろう。

(阿部良司)

(↓春に咲く花はどちらも白です↓)

ミヤマシキミの蕾 (赤)



ミヤマシキミの蕾 (白)



ミヤマシキミの実

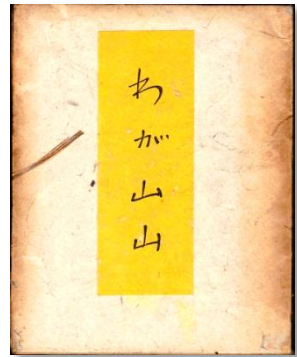


日光・外山（とやま）ハイキングと滝尾古道散歩
～知られざる名所旧跡を訪ねて～

幾度も繰返して言うことだが、山の魅力は山へ行ってみなければ判らない。まして冬山の魅惑は、実地に雪と氷の山に行って、そこで苦しんだり喜んだりした人でなければ判らない。

敢て三千米の高峰とは言わない。二千米級の山で結構だ、僕は先ず、何はともあれ諸君に一ぺん雪の山に登ってみられる事をお勧めする。その上での話だ、諸君が冬山に病みつきになってしまうか、或は万が一にも嫌いになってしまうかは。

冬山は危険だという。そうに違いない。しかしそういう危険を冒すからこそ楽しみも大きいんだ、と言うのは青年の壮語であって、出来るなら冒険を避けて大きな楽しみがしたいのだ。ただその大きな楽しみを得るためには、止むを得ず危険に近寄らざるを得ないのだ。感動的な素晴らしい景色は、易々と手の届く様な所には置かれていない。最も輝かしいものは、最も困苦を要する所にある、それは人生によく似ている。



深田久弥著『わが山山』（昭和9年12月20日、改造社発行）

日光山内には東照宮、二荒山神社、輪王寺の他にも数々の名所旧跡があります。神橋下の駐車場に車を置いて、まずは興雲律院に参詣し、新年初登山として外山に登りましょう。急登ですが麓から小一時間で登れます（標高差は200m）。神橋まで戻って、勝道上人が初めて日光の神々をまつたと伝えられる本宮神社、勝道が建立した四本竜寺に詣でます。勝道上人をまつる開山堂には勝道の墓とされる五輪塔があります。ここから次々と現れる名所旧跡を見ながら石畳の道を進み滝尾神社に至ります。滝尾神社は弘法大師空海が820（弘仁11）年に建立した神社です。修験道の開祖役行者をまつる行者堂を越えて二荒山神社に出ます。外山は往復しますので登山口で待っていただいても構いません。どなたでも参加いただけます。

日 時：1月13日（日）AM7:00 北小西門集合

行 程：鹿沼——神橋……興雲律院……登山口・外山往復……神橋……

本宮神社・四本竜寺……開山堂・香車堂・陰陽石・仏岩・養源院跡
……北野神社……白糸の滝……滝尾神社……行者堂……空畑地蔵
……大猷院・日光二荒山神社……神橋——鹿沼

服 装：防寒着（セーター、ジャンパー、タイツ）、帽子、手袋、
靴下（2枚重ね）、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、ポット、レジャーシート、雨具、お弁当、おやつ、
お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋

あると便利な物：双眼鏡、カメラ、ガイドブック

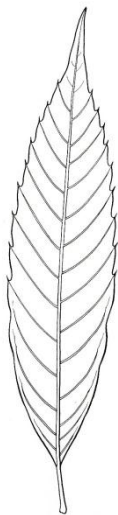
（栃木県の歴史散歩、栃木の山140、栃木百名山ガイドブック）

1/25,000 地形図は「日光北部」

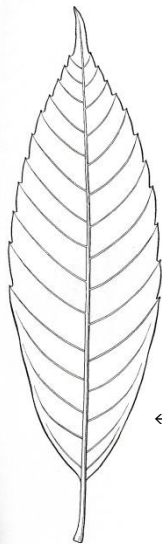
会 費：おとな300円、子ども150円

今年度初参加の方は年間保険料800円

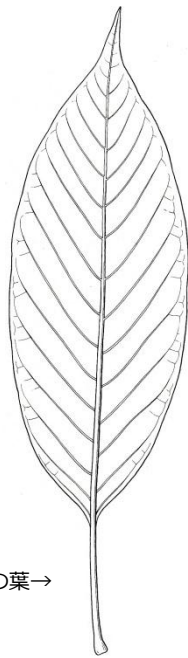
問合せ：自然観察クラブ 阿部（090-1884-3774）



←ウラジロガシの葉



←シラカシの葉



アカガシの葉→

文一総合出版『落葉図鑑』より

☞ 会員からのおたよりなど ☜

牧野富太郎生誕150年シリーズ、大変興味深く読みました。

「植物記」の復刻版が出たと知った時、即、書店に取り寄せてもらいました。

貴重な本だから是非手元に置きたい、思い切って購入したものの、当時はパラパラとページを捲ただけで、ずっと日の目を見ずにいました。

鹿沼の自然・栃木の旅にまたまた誘発されて、改めて手にして驚きです。

冒頭の 萬葉歌のツチハリ

吾がやどに生ふる土針心よも想はぬ人の衣に摺らゆな

萬葉集巻七のこの歌の中に読み込まれているツチハリという植物に関する考察にぐいぐいと引き込まれてしまいました。まだまだ読みたいところが満載で、これぞ私の宝物です。

10月号の「野外の雑艸」も勿論読みました。まさに「目から鱗が落ちる」とはこういうことなのですね。

毎号 毎号すばらしい発見ができて、なんとうれしいことでしょう。感謝で一杯です。

(櫻井節子・12月8日)

“牧野富太郎生誕 150 年特集”に初めての読者の方からの反応でした。

会長のヨロコビの声をお伝えしましたところ…

早速読んで頂きありがとうございました。

実は迷っている事があります。

牧野富太郎の本文だと

吾がやどに生ふる土針心よも想はぬ人の衣に摺らゆな ですが、
原典の訓読表記は

「吾が屋前に」生ふる土針「心従も」(こころゆも)想はぬ人の衣に摺らゆな
となっています。でも、牧野富太郎の引用文なのだからそのままでもいいのでしょうか。

行数が揃っていないかったり、適切でないところなどお気付きの箇所などよろしく直していただきますようお願いいたします。

(同上・12月12日)

話題の歌の原典はいわゆる「万葉仮名」で書かれています。

わがやどにおうるつちはりこころよも おもわぬひとのきぬにす ら ゆ な
吾屋前爾生土針従心毛、不想人之衣爾須良由奈

櫻井さんには当然お分かりのことだったのですが…

手軽なところでネット上に見つけたのをお知らせしたところ、

万葉仮名の原文までお知らせいただき、すごいことです。実は私も教科書として使われた岩波文庫の分厚い万葉集を物置から探し出してひもといっていました。そのほか「新歴代文学選」上世・中世・近世篇など数冊いずれもの表紙や本文の四隅がセピア色になって見つかりました。

懐かしい想いに浸る一方、みゆきさん(注・編集人)の卓越した探究心と考えに触れることができそんな話題で交流が出来る事を心から嬉しく思います。

とても若返った気になります。これからもよろしくお願い致します。

(同上・12月12日)

とても感激してくださって、なんだか面映ゆい限りでした。

会長自身からさらに返書の意をこめた一文が寄せられています。次ページをご覧ください。

今のところ、こういった投稿や声のお便りをお寄せ下さる方は限られていますが、各人の興味のままに話題の交換や交流が展開するのは、編集人として喜ばしいことです。引き続き皆様の投稿をお待ちしています。



牧野富太郎のこと、本のこと、月報創刊のこと

～櫻井節子さんへのご返事に代えて～

牧野富太郎は文久2年(1862年)4月24日、今の高知県佐川の生まれで、昭和32年(1957年)1月18日、95歳でその生涯を全うされている。私が牧野さんにお会いして話を伺いたいと思っても、昭和33年生まれの私とは生きた時代が違うのだから到底かなわない。

「独学」という言葉がある。他人に教えてもらわず、自分一人で勉強する、という意味であろう。しかし、一人で勉強する時に書物を読めば、それはその著者に教えてもらっているのと同じではないだろうか。

今、牧野さんに会って話を伺おうと思ってもそれは叶わない。しかし牧野さんは勉強され、研究された成果の多くを書物に残されている。だから私たちはその書物を読むことによって牧野さんの教えを請うことができるのである。むしろ話を伺うよりも正確に、その教えを享受できるのかもしれない。

現在では便利な図鑑が各種出版されている。写真もきれいで検索表も詳しく、調べやすくなっている。

植物の名前を特定する時に最も重要なのは、最も近い種との「同定のカギ」である。そのカギの部分の写真などが種類を問わずに載っていれば実に便利な図鑑になると思う。

そうして、私たちはその図鑑の著者から多くの知識を得ることができるのだ。しかし、さらにその植物についての知識を得ようとする時、たとえば牧野さんの著書を読めば、牧野さんの研究された成果を、自分の知識とすることができるのだと思う。

今年4月、「自然観察クラブ」の月報を発行しようと発起し、表紙は絶対、自分の好きな山の本や生物関係の書物の書影にすると決めた。たしか創刊号を親しい方にお送りしようと、郵便局に切手を買に行ったら、植物の絵の切手が目についた。よく見ると「牧野富太郎生誕150年」とあった。そこで初めて、この年が富太郎が生まれて150年に当たることを知ったのである。そこで長年収集してきた牧

(次ページへ続く)

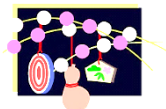
野の著書の中から一冊を表紙にしようと思ったがどれにしていいいか決まらない。5月号を飛ばして6月号、7月号と、その内容や時節に合った本を表紙に使ったが、8月号になって「ええい」と決めたのが少年少女新伝記文庫「牧野富太郎」であった。

それ以来、目次を見てこれだと思う文章を書影に添えてみたが、櫻井さんから「解説がいい」という感想をいただき、あわてて、中身のない頭をしぼって解説みたいなものを付けてみた。小学生時代から最もこわいのは読書感想文で、どうしても「あらすじ」になってしまうのである。書評など書くのは到底不可能である。そもそも読書が苦手な者が本を集めるというのはおかしいと思われるかもしれないが、読みたい本はとりあえず入手しておかないと次はいつ手に入るかわからない。しかし本好きが必ずしも読解力にたけているとは限らない。本を読む時間がない、読みにかかってもなかなか進まない。そういう理由で、読まない本がたまっていくだけなのである。

古書肆の応援をするわけではないがデフレの波は古書店にも押し寄せ、古書価は暴落している。といって本は買いどき、と思いきや、我々の所得も暴落しているのだから、本など買っている余裕はない。まして読まない本を買うなど論外なのだが、しかし、読まない本を買って大切に書架に収めておくことも文化の継承の一助になると思うのだ。なぜなら、誰も古書を買わなければ古書の価値はなくなり、しだいに処分される物が多くなってくるのだから。

牧野シリーズへの感想を櫻井さんから初めていただき、ありがたいかぎりです。ご返事と思って書き始めたものがこんな文章になってしまいました。

今年も月報の発行を続けるため、自然観察の記録、旅の思い出、登山紀行、文学、歴史、本のことなど、皆様の投稿をお待ちしております。（阿部良司）



1年間お世話になりました。
新しい年もまた子どもたちと一緒に
自然観察や歴史探訪
その他を楽しみましょう！
どうぞよいお年を…



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第9号

2013年1月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市上田町 1923

発行人 阿部 良司

年会費 1200 円

クリーニングハウスあべ



ホームページでもご覧になれます→